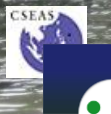


# ざいちのち

実践型地域研究ニューズレター—No.34 2011年8月

まちやむら、そこに住む人びと（ざいち）の、知恵や生き方（ち）から学び、実践する活動です。



京都大学

学際融合教育研究推進センター・生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

守山市今浜町

美崎自治会 大川の清掃

## 守山フィールドステーション

### フィールドとフィールドがつながるとき —ベンチがつなぐ、山とまち・人と人—

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

きっかけは、一通のメールだった。「100 bench project に挑戦します。間伐材について教えて下さい」と連絡くださったのは、守山市の若手経営者の方々。異業種の若手経営者が集まり、個々の商売以外のさまざまな活動を守山で展開している。目をひくのは、「朝活」。毎週木曜日の早朝、中山道守山宿から JR 守山駅までの道を掃除して歩く活動である。そんな彼らが立ち上げたもう一つの活動が、“100 bench project”である。

守山市は毎年人口が増加し続けている稀有な自治体で、中心市街地に増え続けるマンションに越してくる方も少なくない。隣にどんな人が住んでいるのか知らない、地元（マンションの足下）の商店街では買い物はしない、守山にどんな歴史や文化があるのか知らない……人口増の影には、こんな現実がある。“100 bench project”はこんな状況の中で生まれた。まち中に、人と人とが語り、つながる空間を作りたい。そんな思いで立ち上がったプロジェクトだが、面白いのはその目標に至るストーリーだ。まず、彼らが一つベンチを作ってみる。ベンチには彼ら独自のコンセプトがあり、色や形にその思いを込めて作る。それが完成すると、今度は次のチームに自分たちが得たベンチの組み立て方などのスキルを伝える。すると、次のチームはそのスキルをもとに自分たち独自のコンセプトとデザインで二つ目のベンチを作る。こうして、人から人にコツや技術が伝わりながら、100 個のベンチが守山に生まれて、今度はそこで誰かと誰かがつながっていくというストーリー。そして、プロジェクトの時間軸がとても長いことも魅力の一つだろう。

ところで、私が彼らと知り合ったのは、実践型地域研究推進室の試みの一つとして、中心市街地の問題を

取り上げ、町家でソバを栽培していたときだった。私は長靴をはいて、盆過ぎのまだ暑い最中に水遣りに通い、草ひきをしていた。文字通り、泥臭い取り組みだった。中心市街地の問題を考えるとき、「経済」が中心に取りざたされる中で、一方ではこういう泥臭さも必要になる日がくるだろうな、などと草と格闘しながら確信していた。が、自信はなかった。こんな取り組みは、きっと研究者の「実験」で終わってしまうんじゃないか。地元は冷やかかで、私の「実験」の期間が終われば、こんな泥臭い取り組みは終わってしまう。そんなことを、より強い確信に満ちて考えていた。だから今回、地元経営者の方々から相談をいただいたときは驚いた。泥臭い取り組みを、地元の人が地元のためにやろうとしているのだ。そして、その話を自分につなげていただいた。本当に嬉しかった。

彼らは、ベンチの材料に滋賀県の間伐材を活用したいと考えた。しかし、守山市には山がないし、林業がないので、間伐材のことも木のことも山のことも知らない。そこで、まずは間伐材のことを勉強してみてくださいとお願いした。そして、その勉強の場に朽木フィールドステーションを選び、東南研特任研究員の今北哲也さんに講師をお願いした。5月30日には、彼らとともに朽木の山を見学に行ってきた。ちょうど台風1号が近畿を直撃した朝だった。今北さんからは前夜、「国道が通行止めになったら無理するな」と連絡いただいた。当日はやはり通行止めで、私は彼らに「延期」を促すメールを送った。すると、相当遠回りだけれど反対側の国道は通れます！行きましょう！という返事がきた。集合場所に着くと、普段はスラリとおしゃれな人たちが、長靴・カッパ姿だった。それを見た瞬間も嬉しかった。

ここで私ができることは何か。これまでの実践とつながりを最大限に活かしてみたいと思う。

(続く)

## 災害からの復興と焼畑

朽木 FS 黒田 末寿

### 1 焼畑の季節の始まり

7月2日、滋賀県立大学・京都学園大学の学生諸君も参加し、17人で余呉町中河内の今年の火入れ予定地一反(約991.7㎡)近くを伐採した。事前に植生調査と土壌サンプル採集を行った。さいわい、カンカン照りにはならず、ウワミズザクラやウツギを伐り、秋まで残しておきたい太いヤマノイモのツルもバシバシ刈った。昼は永井邦太郎さん手製の弁当を美味しくいただき、充実した一日となった。

7月13日午後、永井さん、今北哲也さん、黒田の3人で残りを伐り払う。夕方、山陰でヒグラシが鳴いて作業終了。あとは、火道(防火帯)を掻き、最上部に防火のトタンを張れば、8月19日の火入れを待つばかり。(行事予定をご覧ください。)



暑さも斜面も苦にせず伐採する  
永井さん

昨年の焼畑は、ササの火力が強く地表下5cmで110度以上にもなった(ざいちのち23号)ので、ササも雑草もほとんど再生していないが、ササ根は残って土壌を押さえている。今年は、昨年の火入れ地の北側1/3を放置して植生遷移の観察地にし、残りにソバとヤマカブラを、新しい火入れ地にはヤマカブラやダイコンを植える。



写真中央の立木の左側が今年の火入れ予定地、右側は昨年の焼畑

### 2 災害復興と地域

話は飛ぶが、東北の被災地を訪れたとき、あらためて生存基盤や焼畑の意義について考える機会があっ

た。ある町では、大手企業が学校と病院に文房具と薬品を2年間無償提供することをめぐって意見の対立があった。役場はこれを歓迎したが、「それでは町の薬屋も文房具屋もつぶれる」、「地域の復興にはならない」と反対する意見があった。復興とは被災地域の自立を指すことと考えると、その方が正しい。

また震災後、岩手県の住田町は、独自に隣の陸前高田や気仙沼の被災者のために、110軒の木造仮設住宅を地元産の杉を使って建てた。被災地域の木工や森林施業者は職を得て元気になり、杉材の仮設住宅に入居した被災者はその温かみを喜んでいる。しかし、他の4万軒近い仮設住宅のほとんどは関東圏の大手プレハブ業者に任され、地域の工務店や大工は被災者としてそれを見ているだけで、自ら立ち直る機会を奪われてしまった。

### 3 地域や個人が自立する生産力とネットワーク

被災地の住民への中央管理と大手企業による「効率の良い」生活資材の提供は、被災初期には必要であるが早めに止めた方がよい。なぜなら、この様なやり方は、莫大な利権を生み、それゆえ運営の透明性はあてにならない。福島原発の事故は、原発自体の危険性だけでなく、エネルギーや物資供給を一極集中・一元的に管理する方式のあやうさを端的に示している。3月11日後に明るみに出てきた原子力政策と原発管理の虚偽は、まさにそういうことを示している。

エネルギーや物資供給の一極集中・一元的管理からの脱却は、地域の自然エネルギー利用や地産地消と地域間ネットワークの構築で可能になる。それは地域の自立であり、エコであると同時に災害に強いシステムになる。私たちが焼畑や小水力発電を追求する目的も同じだ。地域の生態的条件を生かした技術を学ぶことは、誰にでも取り組むことができる食糧危機やエネルギー危機への備えにもなる。持続可能で自立的な食料やエネルギーを生産する地域、それを担う個々人の力(=「百姓力」)、そしてそうした地域間のネットワーク、この三層構造が私たちの生存基盤と考えている。

(訂正：前号で「アラス」に関して『白山麓の焼畑耕作-その民俗学的生態誌』(橘礼吉1995)を不正確に引用していたので訂正します。橘も焼畑での「アラス」と水田耕作の「荒らす」の意味の違いに言及し、また、「ムツシ」を「戻す」からの派生語とすることに疑問を投げ、検討しています。詳しくは同書第2章。)

### 清滝の潜在力を求めて — 三高生逍遥の宿・ 清滝ますや旅館の当主に聞く —

亀岡 FS 研究員 豊田 知八

かつては愛宕山岳詣での宿場として旅籠<sup>はたご</sup>やお茶屋が軒を連ねた清滝に、唯一残る料理旅館「ますや<sup>[1]</sup>」。明治から昭和初期にかけて第三高等学校(三高)<sup>[2]</sup>の学生達が足繁く通った宿だ。「なぜ、三高生たちは京都の東・吉田からほど遠い清滝で遊学に興じ、青春を謳歌したのか?」、三高卒業生の高齢化により忘れ去られようとしている「若き魂たちの物語」を伺いに、ますや十三代当主・森田雅雄氏(83)<sup>[3]</sup>を訪ねた。

ますやへ愛宕参詣の一般客に交じり、三高生が訪れるようになったのは、三高が創設された明治時代からだという。高雄からのハイキングコースで清滝の地を知り、先代当主の森田清治夫妻が学生を大事にして可愛がったことで常宿となる。彼らは高歯の下駄で、吉田から徒歩でやって来た。清滝に近づくと、太鼓を叩きながら「ますや、ますや」と大声で叫びながら店まで来た。「うち

で遊ぶ三高生  
たちは出世払  
いは当たり前  
で、卒業までた  
だで通った人  
もいた。中には  
卒業式の翌日



親御さんがまとめて払いに来たり、卒業後、社会人になってから払いに来た人もいた」、また、「金子<sup>きんす</sup>を全て飲んでしまい、精算時に電車賃だけ立替えると、そのお金でまた飲み、歩いて帰る破目になった人や、夜中歩き疲れて、北野天満宮で、ますやの提灯を抱いて眠るという豪放な者もいた」と話す。「しかし、おやじ(先代)はただ学生を自由に遊ばせただけではない。おやじは試験前になると絶対に酒は売らんかった。「試験が終わったら浴びるほど呑みなはれ、勉強に専念するように」と学生に諭した」という。そして試験が終わった学生たちは、午後から吉田を発ち、試験の憂さを晴らすように宴会に興じ、当主も女中も交じって「紅

もゆる<sup>[4]</sup>」を大合唱して夜通し騒ぐのが恒例だった。地方中学校出身者の多い三高生たちにとって、時には温かく見守り、時には厳しく叱る先代は「京都の親代わり」のような存在であり、彼らはますやで「遊び方」を学んだ。商売を超えた絆が結ばれていたのだろう。

森田氏は、古い三高生の同窓会名簿とスクラップ帳を見せて下さった。馴染みの人物には下線が引かれた名簿と新聞の切り抜きスクラップ帳は 10 冊にも及ぶ。「三高を卒業され、社会で活躍されている方々が新聞で紹介されると必ず切り取ってここに貼っている」と嬉しそうだ。資料には卒業後、戦前・戦後を通じて日本を背負って立った人物がキラ星のごとく並んでいる。文士・作家では梶井基次郎や田宮虎彦、織田作之助に三好達治、荒木文雄など、政治家では濱口雄幸に幣原喜重郎、片山哲といった総理大臣経験者も、学者では湯川秀樹や朝永振一郎、江崎玲於奈など多士済々だ。当時と変わらない大正から昭和初期の木造料理旅館の柱一本一本から、この宿で青雲の志をたぎらせた三高の若い魂が、強く迫ってくるのを感じた。森田氏の「ますやと三高生」の夜咄<sup>よばなし</sup>は 4 時間を超えた。この話の中に、現在の日本教育が捨て去った貴重な精神性が隠されていることを感じざるをえなかった。

- [1] 愛宕詣りの茶店として寛永 8 年(1631)に創業。料理旅館となるのは明治時代から。
- [2] 京都市に開校した旧制高等学校(略・三高) 明治 19 年(1886)に設立。明治 24 年に高等学校に改組される。京都大学の前身。清滝には清遊や逍遥と称し訪れる。
- [3] 現在も三高の同窓会に吉田神社宮司とともに特別ゲストで招かれている。
- [4] 旧制第三高等学校 逍遥の歌、寮歌。作詞 澤村胡夷(1884-1930) 作曲 不明

## 催しのご案内

- 文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議
- 1. 日時: 平成 23 年 8 月 1 日-3 日
- 2. 場所: 阿武町のうそんセンター  
(山口県阿武郡阿武町福賀、最寄駅 JR 山口線徳佐駅)
- 〈共催〉 京都大学生存環境科学研究ユニット・東南アジア研究所、高知大学自然科学系「中山間プロジェクト」、阿武地域グリーンツーリズム推進協議会

〈後援〉 阿武町、山口大学エクステンションセンター

- \* 第一部は、『むら』の幸せてなんかねえ?～阿武町から『むら』を考え直す公開セミナー～(8月1日(月)14時～17時)となります。  
問合せ先: 阿武町役場 経済課 電話: 08388-2-3114
- 朽木 FS 《くらしの森》づくり 2011 8月の予定  
火入れ・播種: 8月19日(金)中河内、8月21日(日)赤子山  
連絡・問い合わせ先: 火野山ひろば hinoyamahiroba@yahoo.co.jp
- 8月の定例研究会はお休みします。

## アジア国際チーム相互啓発農村開発 実践研究の実施

東南アジア研究所 安藤和雄

「アジアからの研究者に、日本の農村の抱えている問題と、日本では農村開発の基軸が、経済発展から、村に住むという誇りやアイデンティを自覚した住民の主体的活動支援に移行していることを理解して欲しい」。「農村開発における経済発展の偏重の結果が何をもちたらし得るのかを現場で直観的につかんでもらいたい」。こうした目的で、招へい者たちが地方自治体や自治会の事業に参加し、村の現場での意見交換を7月21日～25日の期間で実施している。

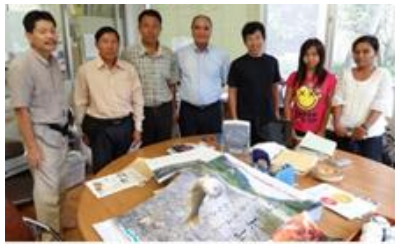


写真1 美山町知井振興会にて(2011年7月25日、撮影安藤)

### 〈主な参加者〉

Prof. Khin Oo (Ms)、東南アジア研究所招へい海外客員研究員、ミャンマー Yezin 農業大学教授、農業普及学; Dr. Thin Thin Myat (Ms)、国際交流基金招へい研究員、ミャンマー Pyi 大学地理学科講師、人文地理学;  
Mr. Somphanh Pasosouvang、ラオス国立大学農学部副学部長(東南アジア研究所国際共同研究プロジェクト)、農業普及学; Mr. Yezer、ブータン王立大学 Sherbte コレッジ社会科学部部長(総合地球環境学研究所高所プロジェクト)、計画地理学;  
Ms. Myit Myat Moe、ミャンマー Yezin 農業大学院生(東南アジア研究所ベンガル湾科研)、農業経済学。

### 〈参加型調査と研究会などのスケジュール〉

7月21日、滋賀県琵琶湖博物館での資料保存見学、京都大学生存基盤科学ユニット京滋 FS 事業月例研究会(守山 FS)にて発表。7月23日

「野洲川でんくうの会」主催、守山市美崎自治会協賛による「大川周辺自然観察会」へ参加。7月25日～26日 京都府南丹市美山町における過疎地域の地域活性事業、美山町民俗資料館、南丹市美山町支所、知井振興会などでの調査と意見交換。7月27日～29日 東南アジア研究等への表敬と意見交換。8月1日～3日 山口県阿武町における「文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議」に参加と発表。2011年8月4日 山口県周防大島町の棚田地域の調査。

### 〈南丹市美山町での直観的指摘〉

美山町支所から美山町北集落への車の中で、Yezer さんが「ブータンと私が専門としている地理学からみれば、美山町には「通り(どおり)」があるから農村ではない。通りとは英語の Street のことだ。生活レベルは都市と変わることがない」とコメントした。商店街あり、電気や車、舗装道路がある。美山町はブータンでは街だ、というのである。では、なぜ、街となって発展した美山町から人々は都市へ出てしまったのかと尋ねた(現在の人口は過疎現象が始まる以前の人口の4割となり、65歳以上の高齢者が占める割合が4割)。「農村が都市のコピー(模倣)だからではないのか」という答えが返ってきた。たしかに、Yezer さんが指摘するように、農村の発展の合言葉は都市の「文化的な生活」に追いつけであった。生活基盤を整え、都市並みにすることが、結果として、農村から人を押し出す条件をつくってきたという見方は、日本の農村開発関係者は簡単には認めたくない指摘である。しかし、ブータンの人にはそう見えてしまうのであろう。山口での国際会議のテーマの一つであり、是非、Yezer さんのコメントを会議でとりあげて議論していきたい(2011年7月28日記す)。